

Title	日本人英語使用者コーパスの編纂と応用 : 国際英語としての「日本英語」の特徴の分析
Author(s)	藤原, 康弘
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59888
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	藤原康弘
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 25756 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	日本人英語使用者コーパスの編纂と応用：国際英語としての「日本語」の特徴の分析
論文審査委員	(主査) 教授 日野 信行 (副査) 教授 岩根 久 准教授 田畑 智司

論文内容の要旨

本博士論文の主たる目的は、「日本人英語使用者コーパス」(Japanese User Corpus of English: JUCE)を、現実的に収集可能な領域から編纂し、その分析を通じて、先人達(Saito, 1928; 國弘, 1970; 鈴木, 1971; 本名, 1990; 日野, 2008)が述べる日本語、及び日本文化を土台とする「日本語」の特徴を実証的に探索することである。日本の英語教育、及び第二言語習得研究の趨勢において、所謂「日本人英語」は、母語話者英語と比して、「不十分」、「未発達」とのレッテルが貼られ、初級者から上級者まで全て「学習者」英語と見做されてきた(e.g., 竹藪, 1982)。その一方、当英語変種を母語話者英語から独立した存在として積極的に評価する論客も少数ながら継続的に散見されてきた(代表的論客の詳細はHino, 2009参照)。しかしながら、これらの「日本語」の主張は、実証的研究にて「日本語」たる特徴を示してきたとは言い難い; 多くは経験則に基づく主観的主張、または客観データがあるにせよ文献、限られた数少ない人工的な例文、逸話等に基づいたものが多い。

勿論、彼等の「日本語」のアプローチによっては、実証的証拠を示すことは不可欠では無いとも考えられ得る(Hino, 2012, personal communication)。即ち先に「日本語」を創造的に構築し、教師と学習者間の個人レベル、または社会的レベルの受容を経て教授を行う事で、言語使用実態に影響を与えるというアプローチ(Hino, 2012)を想定し得るからである。当アプローチは理解可能なものではあるが、国際英語としての「日本語」の実証的、描写的アプローチは、現時点における「日本語」の存在可能性、また特徴を明らかにし得るとともに、当変種の今後の発展可能性を相互補完的に示すものであることに疑いの余地は無い; 何より我々は「日本語」たるものが実存するのるか否かさえ、具体的に示し得ていないことを忘れてはならない。そこで、本研究では「日本語」、及び「日本人英語使用者」を定義し、一定程度当言語使用のサンプルを収集し、再現可能性を担保した手法で、国際英語としての「日本語」の特徴の分析を試みる。

本博士論文は3部構成であり、「日本人英語使用者コーパス」編纂に至る過程を示す第一部の「学術的背景」、当コーパスを応用し国際語としての「日本語」の言語的分析に焦点を当てた第二部の「実証的研究」、日本語の諸特徴を踏まえ日本の英語教育への示唆を行う第三部の「日本語と日本の英語教育」とに大きく分かれる。第一部は3つ、第二部は2つ、第三部は3つの章で構成され、計8章から成る。以下に各章の概要を簡潔に示す。

まず第一章では、当博士論文プロジェクトに関連するa) コーパス言語学、b) 国際英語関連領域である1) 国際語としての英語(English as an International Language: EIL)、2) 諸英語(World Englishes: WE)、3) 国際共通語としての英語(English as a Lingua Franca: ELF)の各分野の歴史的背景を概括し、それぞれの経緯から生じる研究目的、研究領域の差を俯瞰し、a)、b)の両者の学際的領域の変化を論じる。その分野間の差異は本論における骨子を成す構成概念である「日本人英語使用者」、即ち「学習者」、「使用者」の区分に反映されており、a)の伝統的主流を受け継ぐ傾

域ではKachru, B. (1985, 1992) の述べる内円 (NS) と外円／拡大円 (NNS) 間, b)の諸英語論では内円／外円 (established/institutionalized) と拡大円 (performance, norm-dependent) 間で, 使用者, 学習者を区分している。つまり, 上記分野では, 拡大円に属す日本人英語使用者は, 実態がどうあれ, 「使用者」ではなく母語話者規範を順守すべき従順な「学習者」として区分されざるを得ない事を指摘する(藤原, 2006; Fujiwara, 2007; Scidhofer & Berns, 2009)。一方, EIL/ELFにおいては分け隔てなく, 母語性, 制度性に関わらず言語話者を使用者(時に学習者)と概念化し, 主としてELF使用者コーパス構築のプロジェクトが行われてきたことを指摘する。上記の経緯の故に, 拡大円, とりわけアジア圏における「使用者」レベルのコーパス言語学的研究成果は執筆時においてはほぼ皆無であることを指摘し, 使用者コーパス構築の必要性を述べる。

第二章では, 日本人英語使用者コーパス (Japanese User Corpus of English: JUCE) 編纂に際し, 1) 「学習者」「使用者」の区分に関しより焦点を当てて考察を深め, 本論における「日本人英語使用者」の定義と付随する留意条件を提示し, 次に2) 研究対象とする言語的側面を示す。より具体的には, 応用言語学上, 言語教育上の「学習者」, 「使用者」の両概念を精査し, その定義の妥当性, 有用性, 必要性は認めつつも, 当定義をコーパス構築において直接援用する場合, 既存の学習者コーパス, 新興の使用者コーパスが結局同質のものとなる危険性を指摘する。次に本論執筆時までに現存する英語「使用者」コーパス構築時の「使用者」要件, 即ち語用論的, 心理的, 教育的, 職業的, 能力的要件を吟味し, 第二言語習得論, コーパス言語学, 国際英語関連領域の継続的発展のため, コーパス構築時の「使用者」定義に教育的, 職業的変数を加味して差別化する重要性を主張する。

第三章ではJUCEの研究対象サンプル, 仕様を詳細に示し, 当コーパスの利用可能性, 展望を概括する。より具体的には, JUCEが研究対象とする言語使用者による言語サンプルの具体例を示し, 当コーパスの仕様に関連する既存のコーパスであるthe International Corpus of English (ICE, Greenbaum, 1996), またMicro Concord Corpus Collection A等を参照し, テキストカテゴリー, ジャンル, テキストマークアップ, タグ付与について述べる。その後, 想定される利用可能性について具体的に提案し, 最後に第二部の実証的研究で分析する研究項目, 語彙的側面と談話・語用的側面を提示する。

第二部, 第四章では, 「日本語」の語彙的特徴の側面と考えられる日本語から英語への語彙借用を深層のかつ包括的に分析する。具体的には, 日本語から英語への借用語 (Japanese borrowings in English: JBE) の形式的・意味的屬性, 及び各種統計指標の計量的分析を通じ, 過去, 現在の借用傾向を明らかにし, その借用傾向から「日本語」の一部として今後世界の英語使用者に認知される可能性の高い語を示す。本章の一連の分析により, 「日本語」の語彙的特徴の側面である語彙借用, 即ち第二言語使用者である日本人英語使用者の特殊能力であるコードスイッチング (Cook, 2007; Prodomou, 2008) の一端を明らかにし, またそのコードスイッチングによる日本語由来の借用語の産出を一つの遠因とし, 今後「日本語」の特徴となり得る可能性の高い語彙の屬性を示す。

第五章では, 各種統計分析を通じ, 「日本語」の談話的・語用論特徴を検出する。具体的には, 「日本人英語使用者コーパス」の書き言葉コンポーネントと各種内円英語コーパス, ワードリストとのa) 品詞情報, b) 語彙情報を基に対照分析を行い, 国際英語としての「日本語」のテキストの特徴の同定を試みる。具体的には初段階として1) 最も抽象度の高い品詞情報に対し多変量解析 (クラスター分析, コレスポンデンス分析, 判別分析) を行い, 職業人レベルの「日本語」に特徴的な品詞タグの探索的調査を行う。次に2) JUCEと内円英語コーパスとの比較対象分析により一定程度キーワードとなる語彙を抽出し, 国際英語としての「日本語」における潜在的な談話的・語用論的特徴と見做され得る項目を提示し, その一部を先行研究結果, 他コーパス等を活用し適宜分析を加える。

第三部, 第六章では, 第二部の実証的研究で見出された国際英語としての「日本語」の語彙, 及び談話・語用論的特徴を総括し, 次にその国際英語としての「日本語」の特徴の多くは, 実は過去の日本人英語学習者コーパス研究において, その度合い程度は異なれど, 同様の傾向が確認されてきたことを示す。当結果をもって, 学習途上にある日本人英語学習者と学習過程を一定程度修了した日本人英語使用者に通底する要素を抽出した証左とし, 及びその要素が日本語, 及び日本文化に影響を受けていると説明し得ることにより, 一定程度実証された「日本語」の諸特徴として提示する。

第七章では, 上記の研究成果を以て, 日本の英語教育上, 学習者と母語話者が連続体を成し, 母語話者へのあくなき近似を「発達」と解釈されてしまった中間言語モデル (Selinker, 1972) を無批判に採用するのではなく, 日本人英語学習者と日本人英語使用者が連続体を成す複言語能力モデル (multicompetence, Cook, 1992, 2002, 2007) に基づく英語教育を模索する事の重要性を主張する。つまり日本人英語使用者における言語習得のプロセスは, 日本語から英語へ近似するのではなく, 内在する日本語を第一言語, 英語を第二言語として双方の影響を受けた複言語能力を構築することであることを再確認し, 日本の英語教育コンテキストでは本能力を目標とすることが妥当かつ適切と述べ, 今後の英語教育, 及び第二言語習得研究では二言語双方を考慮に入れた教育, 研究が肝要であることを指摘する。

第八章では, 本研究の意義及び限界点を述べ, 今後の展望を述べる。言うまでもなく, 「日本語」の総体は, 本博士論文を以てしても十二分に網羅することはできない。本論では, 日本人の英語使用を, 学習者水準と使用者水準を明確に区別し, 比較的信頼性の高い言語サンプルを収集し, 内円英語とは異なる可能性の高い潜在的な「日本語」の諸特徴の抽出に一定程度の成果を収めた。しかしながら, 今後様々な言語使用域のコンポーネントの構築 (Morrow, 1997; 藤原, 2006; Fujiwara, 2007), 及び研究成果の複層的な追検証を必要とすることは言うまでもない。今後, 当使用者コーパス研究を皮切りに, 各言語使用域に特化した更なる使用者コーパスの編纂を行い, 継続的に研究を深める必要があることを述べ, 筆を置く。

論文審査の結果の要旨

本論文は, 著者の編纂による「日本人英語使用者コーパス」(JUCE)の分析を通じ, 日本文化を土台とする「日本語」の特徴について実証的に考察することである。日本の英語教育の趨勢において, いわゆる「日本人英語」は, 母語話者英語と比して, 「不十分」「未発達」とのレッテルが貼られ, 初級者から上級者まで全て「学習者」英語とみなされてきた。当英語変種を母語話者英語から独立した存在として積極的に評価する論客も散見されるが, これらの「日本語」の主張は, 実証的研究にてその特徴を示してきたとは言い難い。この点において, 国際英語としての「日本語」の特徴を実証的に分析した本論文は画期的な意義を有すると評価できる。

本論文は, まず第一章では, コーパス言語学, 国際語としての英語 (English as an International Language: EIL), 諸英語 (World Englishes: WE), 国際共通語としての英語 (English as a Lingua Franca: ELF) の各分野の歴史的背景及び現状を分析している。先行研究の精査と高い専門知識に基づいて「国際英語」研究を概観したこの部分はきわめて価値の高い論考となっている。

第二章では, 日本人英語使用者コーパスに関して, 「学習者」と「使用者」という, 「国際英語」研究において鍵となる重要な概念について, 新たな視点から明解に論じている。さらに第三章は, 日本人英語使用者コーパスの研究対象サンプルと仕様を詳細に示し, 当コーパスの利用可能性について展望するものである。

第四章では, 「日本語」の語彙的特徴の側面と考えられる日本語から英語への語彙借用について分析している。また第五章は, 各種の統計分析を通じての「日本語」の談話的・語用論特徴の検出をその内容としている。そして第六章では, 上記の実証的な分析で見出された国際英語としての「日本語」の語彙, 及び談話・語用論的特徴を総括している。たとえば, 冠詞の多用などはその一例である。

第七章では, 上記の研究成果をもとに, 日本の英語教育に関して, 従来の「中間言語」モデルを無批判に採用するのではなく, 日本人英語学習者と日本人英語使用者がある種の連続体を成す「複言語能力」モデルに基づいた英語教育のあり方を模索することの重要性を主張する。

第八章では, 本研究の意義及び限界点を述べ, 今後の展望を述べ論を締めくくっている。

本研究における「日本語」の限界点は, 英字新聞を主たる対象としており, 当該のジャンルの特性に起因する限界も一定程度あるものと考えられる。しかしながら, 「国際英語」という研究分野の歴史的経緯及び最新の動向の双方に通じた該博な知識に基づく優れた論考であり, また統計学に関する深い知識を生かしたコーパス分析の最先端の手法が適切に用いられており, コーパス言語学の立場からも価値の高い論文となっている。また本論文の学術的貢献は, 日本人の英語の分析だけでなく, 英米の旧植民地 (いわゆるOuter Circle) などの英語変種に比べて研究が遅れていた「外国語としての英語」を用いる地域 (いわゆるExpanding Circle) の英語変種の実証的研究として, 先駆的な意義を有するものである。これらのことから, 本論文は, 3名の論文審査担当者全員からきわめて高い評価を得た。

以上のように, 本論文を, 博士 (言語文化学) の学位論文として価値のあるものと認める。